

2025年9月6日・7日

「大学埋文」連絡協議会研究集会／東京大学埋蔵文化財調査室調査研究プロジェクト 11
『歴史資産としての大学キャンパス』

九州大学の構内遺跡発掘調査と保存・活用

福永将大（九州大学総合研究博物館）・谷直子（九州大学埋蔵文化財調査室）

I. 九州大学埋蔵文化財調査室について

1978年、九州大学春日原地区キャンパス（現、筑紫キャンパス）取得に伴う施設整備に係る埋蔵文化財調査を担当する組織として、九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室が設立された。その後、九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室は、筑紫キャンパス以外にも遺跡が存在していることをうけ、2000年度に九州大学埋蔵文化財調査室に改名されている。

伊都キャンパスへのキャンパス統合移転事業を進めるにあたり、福岡市経済観光文化局文化財部（2011年度まで福岡市教育委員会文化財部）の試掘・立会調査によって、箱崎キャンパス（現、箱崎サテライト）内にも遺跡が残っていることが判明していた。箱崎キャンパス跡地売却を円滑に行うため、2015年に九州大学埋蔵文化財調査室を再編し、箱崎キャンパスの埋蔵文化財調査を実施することが決定した。2016年度から発掘調査を開始し、2021年度に対象地区内のすべての発掘調査を完了している（第1図）。

九州大学埋蔵文化財調査室では、2022年度からは箱崎キャンパス跡地で出土した資料の整理・報告作業を行っている。2025年度には発掘調査成果報告書をすべて刊行し終え、同年度末に九州大学埋蔵文化財調査室は閉室することになった。調査室閉室後、発掘調査で出土した遺物や調査研究資料などは九州大学総合研究博物館に移設され、今後は同館にて資料の保管・調査研究・活用を継続的に実施していく予定である。

なお、九州大学埋蔵文化財調査室の沿革については、福田・森編（2018）に詳しい。

II. 九州大学箱崎キャンパスについて

現在、九州大学には、伊都・病院・大橋・筑紫の4つの主要なキャンパスが存在する。本発表で主に扱う箱崎キャンパス跡地は「箱崎サテライト」と呼称され、同地区には九州大学総合研究博物館や同大学文書館などが存在し、現在も活動を継続している。

九州大学の歴史は、古くは江戸時代の福岡藩医学校である賛生館、県立福岡医学校などにまで遡る（九州大学百年史編集委員会編 2017）。1903（明治 36）年に、京都帝国大学福岡医科大学が現在の福岡市東区馬出（現、病院キャンパス）に創立されたことに始まり、そのルーツは医科にあった。文科省が 1907（明治 40）年度予算に計上した工科大学の創立費用に加え、旧財閥の古河家、福岡県・福岡市の寄付により、1911（明治 44）年、箱崎町字地藏松原に工科大学が整備された。工科大学の設置場所の候補地としては、福岡市の東部（箱崎）と西部（西新）の2か所あったようだが、既に設置されていた京都帝国大学福岡医科大学に近いということで、東部の箱崎に決定したようだ。これにより、東京、京都、東北帝国大学に次ぐ4番目の帝国大学として九州帝国大学が創立する。

しかし、設置場所決定後も敷地買収にあたっては困難が続く。工科大学設置予定地は、箱崎の中でも良好な畑地が広がっており、その田畑の買い上げに伴う生活難の恐怖から、地主連は地主大会を開いて買い上げ反対運動をおこしたのである。箱崎キャンパス設置以前の当該地区における土地利用のあり様を間接的に窺い知ることができる、貴重な記録と言えよう。

1911（明治 44）年に完成した工科大学本館であったが、その年に火災によって一部焼失、さらに、1923（大正 12）年にも火災が起き、煉瓦造の本館は全焼した。本館の再建までに使用する場として、1925（大正 14）年に2棟の仮実験室・研究室が建設された。この2棟はのちに大学本部として利用される予定であったため（旧九州帝国大学本部事務室棟、旧九州帝国大学本部建築課棟）、仮設ではなく煉瓦造の建築となっており、その煉瓦は焼失した工科大学本館の外装に用いられたものを再利用したようだ。

1930（昭和5）年に、当時の九州帝国大学建築課長であった倉田謙の設計により、工学部本館が完成した。工学部本館が完成したことで、本部機能が上述の事務室棟・建築課棟の2棟に集約され、九州帝国大学開設以来、医学部（福岡市東区馬出）にあった大学本部が、これを機に箱崎キャンパスへと移管されることとなった。合わせて、1919（大正8）年に農学部、1924（大正13）年に法文学部、1939（昭和14）年に理学部、1949（昭和24）年に法学部・経済学部・文学部・教育学部が設置されるなど、箱崎キャンパスの施設整備・拡大も進められていった。

なお、上述の旧九州帝国大学工学部本館、同大学法部事務室棟、同大学本部建築課棟に加え、同大学門衛所、同大学正門及び塀の全部で5つの近代建造物群は、令和5・6年度に国の登録有形文化財（建造物）に登録されている。

Ⅲ. 九州大学箱崎キャンパス跡地での発掘調査成果

箱崎遺跡は、923（延長元）年に創建された箱崎宮を中核として、中世には港町として博多湾の国際性の一翼を担い、近世には唐津街道の沿線上に位置する宿場町として栄えた遺跡である。箱崎キャンパス跡地は、この箱崎遺跡の北端に位置している。箱崎遺跡の中心部から離れており、当該地区の歴史を物語る文献史料が極めて少ないこともあって、箱崎キャンパス跡地以北における九州帝国大学創立以前の歴史については、長らく不明な部分が多かった。

2016年度～2021年度にかけて実施された箱崎キャンパス跡地における発掘調査の結果、当該地区の歴史が徐々に明らかになってきている（福永編 2022；本田編 2023；宮本 2023）。以下、時代順に発掘調査成果の概要を紹介する。

箱崎キャンパス跡地の地形発達史 箱崎キャンパス跡地では、HZK1701地点やHZK1802地点においてジオスライサー調査が行われており（福田・森編 2018；三阪・谷編 2019）、当該地区の地形発達史が明らかにされている。箱崎キャンパス跡地は、南から北に延びる砂州上に位置している。HZK1802地点の調査では、AD1030年前後に起きた大規模な出水により堆積した土砂をベースとして浜堤が形成された可能性、そして、AD1060年以降AD1281年以前に堆積速度が急に増大していることから、洪水によって河川から砂が大量供給され、砂州が急速に発達した可能性が指摘されている（市原・下山 2019；下山・三阪・市原 2019a・2019b）。

土地利用の開始 箱崎キャンパス跡地において人々の活動が活発になるのは、基本的に12世紀後半以降である。玉縁の白磁碗など12世紀後半を遡る遺物も出土しているが、それらは包含層からの出土であり、かつ、器面の風化・磨耗が著しい。また、こうした古手の遺構・遺物は、キャンパス南東部に偏って見つかったことも注目に値する。

12世紀後半という時期は、箱崎遺跡においても画期と認識されており、生活域が拡大して都市化していく時期と位置付けられている（榎本 2003・2008；中尾 2018）。箱崎キャンパス跡地で認められる当該期における人々の活動の活発化も、この箱崎遺跡の生活域拡大といった脈絡の中で理解できる現象と言えよう。なお、箱崎遺跡北側への生活域拡大については、上述の地形発達史と関連づけた理解が不可欠であると考えている（福永・齋藤 2021；福永編 2022）。

モンゴル襲来と元寇防塁 1974（文永11）年10月、モンゴル・高麗の連合軍が、対馬・壱岐を経て博多湾沿岸に侵入してきた。いわゆる文永の役である。この文永の役の後、モンゴルの再襲来に備えて、国内の防衛体制が強化される。その国防強化の一つとして実施されたのが、博多湾沿岸への「石築地」、すなわち元寇防塁の築造であった。地区によって遅速の違いはあれども、約半年間という非常に短い期間で築造されたことが、文献史学の成果から指摘されている（川添 1971）。

2016年、九州大学埋蔵文化財調査室による箱崎キャンパス跡地の発掘調査で、元寇防塁の石積みが発見された。箱崎キャンパス内の元寇防塁の存在は戦前から指摘されていたものの（中山 1913）、後世の開発によって既に消滅していると考えられていたため、その発見は驚きであった。その後の箱崎キャンパス跡地の発掘調査においても、元寇防塁の痕跡が多数見つかっており、その実態を明らかにすることができた（福永編 2022、第2図）。

調査研究の進展によって、箱崎キャンパス跡地の元寇防塁は、今津・生の松原・西新・博多といった博多湾沿岸域の他の地区と比較して、極めて特異な構造を有していることがわかってきた（第3図）。石積みは一列のみで構成され、石積み背面は砂による盛土で支えられるのみで、控え石や粘土層、版築による補強などの痕跡も確認できない。石積みの背後に平行して築かれて

いる空堀、いわゆる大溝の防御機能を加えたとしても、決して堅牢な構造であると言い難い。

防塁の築造場所やその構造は、文永の役におけるモンゴル軍の侵攻のあり方や戦況を踏まえた上で、考えられたものと推察される。箱崎キャンパス跡地で出土した元寇防塁の脆弱性を考えれば、文永の役での戦況を踏まえた上で、戦略上、当該地区の防備が今津・生の松原・西新・博多といった他の地区と比較して、相対的に重視されていなかったことも十分想定し得る。箱崎キャンパス跡地における元寇防塁の構造的特性が、文永の役において当該地区は大規模な戦場にならなかったことを物語っている可能性がある。

葬送の場としての利用 モンゴル襲来の後、箱崎キャンパス跡地における土地利用のあり方に変化が認められる。HZK2006 地点や HZK2007 地点で火葬土坑（第 4 図）が集中的に造営されるようになり、全部で 40 基の火葬土坑が見つまっている。火葬土坑は茶毘の場であり、遺構からは多量の炭化した木材と焼骨片が出土し、基本的に遺物の出土は認められない。出土炭化木材の中には、棺材と推定されるものも存在する。棺を置く台石が複数データされているものもあり、台石の大きさや配置の仕方などにはバリエーションがある。出土した炭化物を対象に放射性炭素年代測定を実施した結果、13 世紀代～17 世紀前半の年代値が得られている。火葬した骨を納骨する施設は見つかっておらず、その周辺では、掘立柱建物や井戸といった居住・生活を示すと考えられる痕跡も認められない。当該期の HZK2006・2007 地点周辺のエリアは、茶毘の場としての利用に特化していた可能性が高い。

また、近世期になると HZK2007 地点や隣接する HZK1801 地点において、土坑墓・木棺墓・桶棺墓・甕棺墓が多数見つかるようになる（第 5 図）。箱崎キャンパス跡地において、近世期に位置づけられる墓以外の遺構の検出例は極めて少ない点は興味深い。HZK1801・2007 地点では、火葬土坑・土坑墓・木棺墓・甕棺墓以外の遺構は確認できていないことを踏まえると、近世期において HZK1801・2007 地点の一角には墓域が広がっており、葬送に特化した場が形成されていたと考えられる。

近世期における箱崎砂州先端部の状況を窺い知ることができる文献資料が存在する。一つは貝原益軒の『筑前国続風土記』（宝永六（1709）年成立、貝原益軒編『筑前国続風土記』巻之十八糟屋郡表（名著出版、1973 年））、もう一つは青柳種信の『筑前国続風土記拾遺』（天保八（1837）年前後完成、青柳種信編『筑前国続風土記拾遺』巻 39 糟屋郡上、箱崎村（下巻、文研出版、1993 年））である。こうした文献史料の記述や、先述してきた発掘調査成果を踏まえると、近世期、あるいは中世後期以降における箱崎キャンパス跡地は、葬送の場に特化した利用がなされ、人々が日常生活を営む場ではなかった可能性が高い。

こうした葬送の場としての利用は、九州帝国大学創立直前まで継続していたようだ。昭和 2（1927）年 2 月 3 日の福岡日日新聞に、「十五個の白骨を大學葬に附す 應用化學教室新築中に地下一丈の處から出た」という記事が掲載されている。工学部応用科学研究室（HZK2007 地点南側）を建てる際に、人骨や甕が複数出土したため、いずれも丁寧に掘り出して地蔵松原の無縁墓地に埋葬し直したらしい。記事によると、工学部内で複数回の火災が起きており、それは人骨を粗末に扱ったことによる祟りだと町民が噂していたという。

こうした祟りの噂は別の記事でも確認できる。当時、教授・助教授複数名が病気・自殺・事故などで相次いで亡くなったようで、これは工学部造船教室（HZK2007 地点）のタンク工事の際に、多量に出土した人骨を放置した祟りだ、と言われていたようだ（九州大学大学文書館編 2014）。

この 2 つの記事は、大学建設直前まで当該地区に墓地が存在したこと、そして、建設工事で掘り起こされた人骨を大学がどのように取り扱ったのかを示す貴重な資料と言えよう。

近現代の調査成果 箱崎キャンパス跡地の発掘調査では、近現代の痕跡も見つまっている。キャンパス南側の工学部エリアでは、煉瓦造の建物跡が検出されており、また、各地点の攪乱層からは、九州帝国大学時代の遺物も出土している。なかでも大学食器や戦時関連遺物（第 6・7 図）の検討から、帝国大学時代における大学を取り巻く生産・流通経済のあり方が復元されており（田尻 2016；谷 2024）、こうしたキャンパス内で出土した近現代の遺構・遺物は、大学史のみならず、当該地域の近現代史を考える上でも重要な資料であることを改めて認識させられる。

IV. 大学埋文資料の保存・活用について

箱崎キャンパス跡地の元寇防塁は、2020 年・2021 年に国指定史跡元寇防塁に追加指定され、

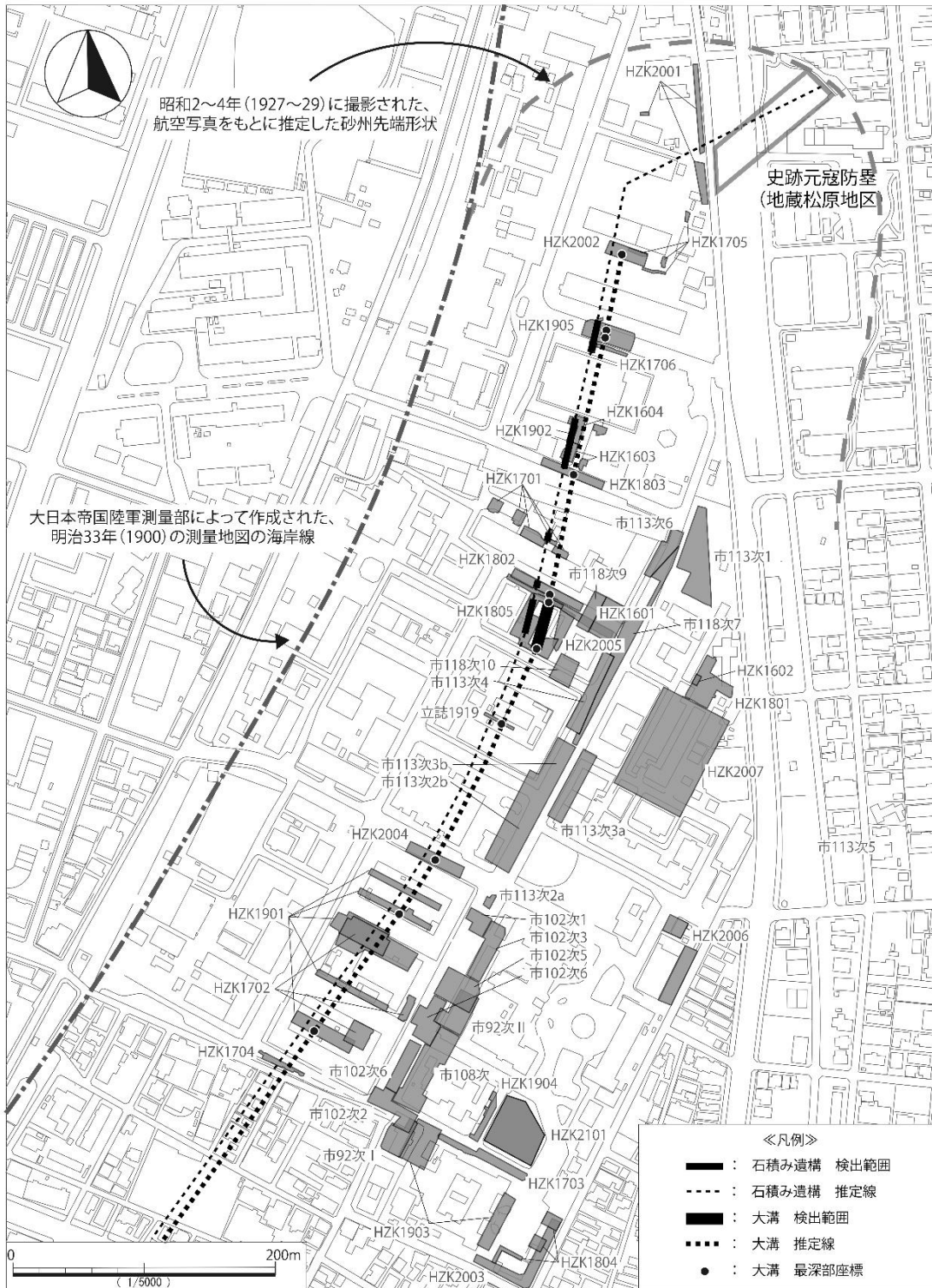
現地にて保存されることになった。現在、箱崎キャンパス跡地では「FUKUOKA Smart EAST」という再開発事業が進められており、新しくできる都市空間の中で現地保存されている元寇防塁を整備・公開・活用していくことが検討されている。

九州大学総合研究博物館では、2009（平成 21）年に「奴国の南—九大筑紫地区の埋蔵文化財—」、2023（令和 5）年に「元寇防塁研究と九州大学」、2024（令和 6）年に「九大一万年史—発掘された九州大学筑紫キャンパス内の遺跡—」といった、大学埋文資料を題材とした展示をこれまでも開催してきた。また、近年では、箱崎キャンパス跡地内を歩き回り、発掘調査成果を紹介する一般向けのツアーなども実施している。

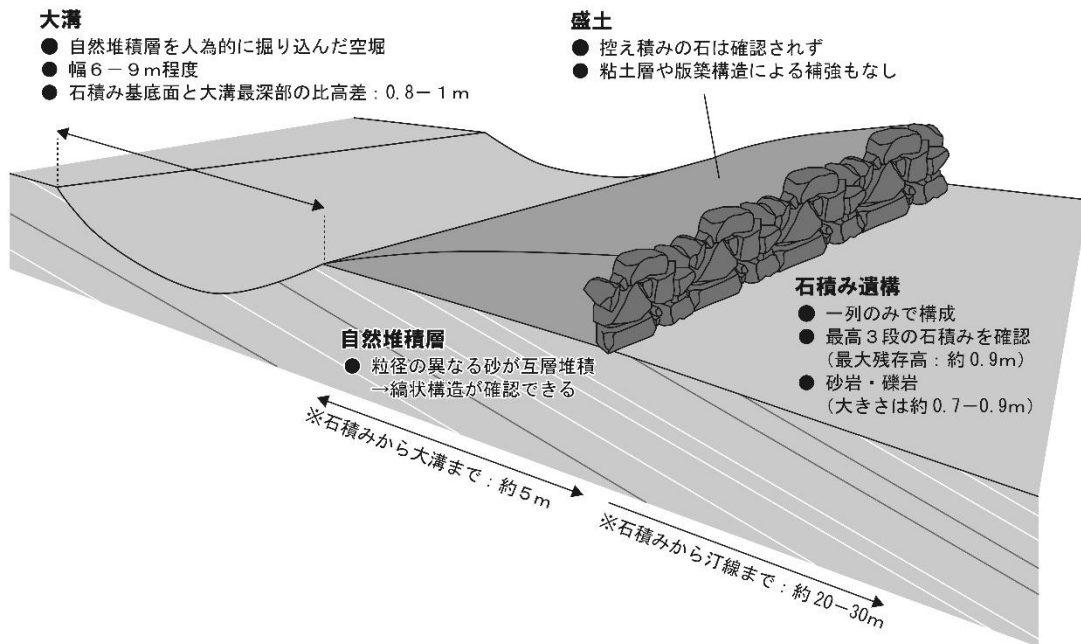
先述の通り、令和 7 年度末に九州大学埋蔵文化財調査室は閉室することとなった。発掘調査で出土した遺物や調査研究資料などは、今後、九州大学総合研究博物館にて保管・調査研究を継続し、上述のような展示・イベントの開催を通して、その最新の調査研究成果を学内外に広く発信していく予定である。大学が有する重要な研究教育資料、そして、歴史資産として、今後も大学埋文資料を積極的に活用しながら、後世に継承していかねばならない。

引用文献

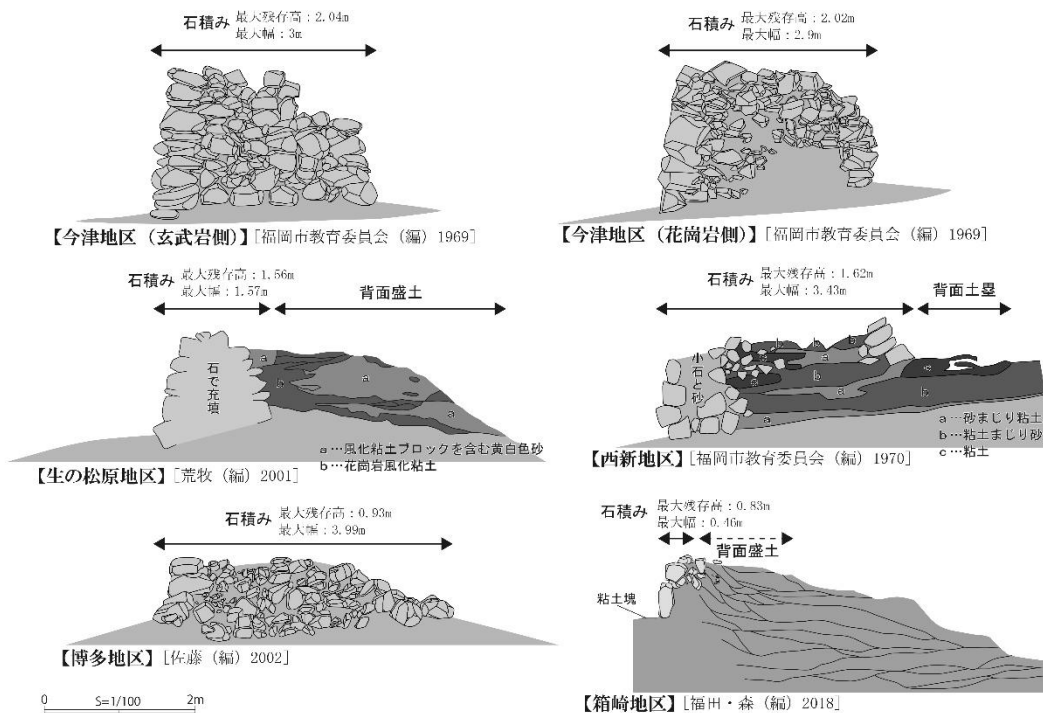
- 市原季彦・下山正一 2019 「HZK1802 地点におけるジオスライサー調査の成果」三阪一徳・谷直子（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706 地点— 付 HZK1802・1803 地点概要報告』九州大学埋蔵文化財調査室報告第 2 集、九州大学埋蔵文化財調査室、118～130 頁
- 榎本義嗣 2003 「福岡市所在の箱崎遺跡について」『中世都市研究会 2003 年九州大会 資料集』中世都市研究会 2003 年九州大会実行委員会、65-74 頁
- 榎本義嗣 2008 「箱崎」大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎（編）『中世都市 博多を掘る』海鳥社、52-55 頁
- 川添昭二 1971 『注解元寇防塁編年史料—異国警固番役史料の研究—』福岡市教育委員会
- 九州大学百年史編集編集委員会 2017 『九州大学百年史』第 1 巻 通史編 I、九州大学
- 九州大学大学文書館編 2014 『鬼頭鎮雄著 九大風雲記』九州大学大学文書館
- 下山正一・三阪一徳・市原季彦 2019a 「HZK1802 地点における土層の概要」三阪一徳・谷直子（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706 地点— 付 HZK1802・1803 地点概要報告』九州大学埋蔵文化財調査室報告第 2 集、九州大学埋蔵文化財調査室、131～133 頁
- 下山正一・三阪一徳・市原季彦 2019b 「箱崎砂州の発達過程の考察」三阪一徳・谷直子（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706 地点— 付 HZK1802・1803 地点概要報告』九州大学埋蔵文化財調査室報告第 2 集、九州大学埋蔵文化財調査室、134～143 頁
- 田尻義了 2016 「九州帝國大學附属醫院跡出土の病院食器に関する考古学的研究」田中良之先生追悼論文集編集委員会（編）『考古学は科学か 下 田中良之先生追悼論文集』中国書店、pp.1023-1036.
- 谷直子 2024 「九州大学箱崎キャンパス出土の戦時関連遺物」宮本一夫先生退職記念事業会（編）『東アジア考古学の新たな地平 下 宮本一夫先生退職記念論文集』中国書店、pp.597-611.
- 中尾祐太 2018 「考古学からみた箱崎」九州史学研究会（編）『アジアのなかの博多湾と箱崎』勉誠社、10-23 頁
- 中山平次郎 1913 『福岡附近の史蹟』九州帝国大学医科大学雑誌部
- 福田正宏・森貴教（編）2018 『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604 地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第 1 集、九州大学埋蔵文化財調査室
- 福永将大（編）2022 『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 5 箱崎キャンパス地区元寇防塁調査総括報告書』九州大学埋蔵文化財調査室報告第 7 集、九州大学埋蔵文化財調査室
- 福永将大・齋藤瑞穂 2021 「箱崎砂州先端部における元寇防塁とその特質」福永将大（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 4 箱崎遺跡—HZK1901・1905・2001・2002・2004 地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第 5 集、九州大学埋蔵文化財調査室、180-197 頁
- 本田浩二郎（編）2023 『箱崎 68—第 102 次・第 113 次・第 118 次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1485 集、福岡市教育委員会
- 三阪一徳・谷直子（編）2019 『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706 地点— 付 HZK1802・1803 地点概要報告』九州大学埋蔵文化財調査室報告第 2 集、九州大学埋蔵文化財調査室
- 宮本一夫 2023 「まとめと展望」谷直子（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 7 箱崎遺跡



第1図 箱崎キャンパス跡地内 発掘調査区配置図



第2図 箱崎キャンパス跡地の元寇防塁模式図



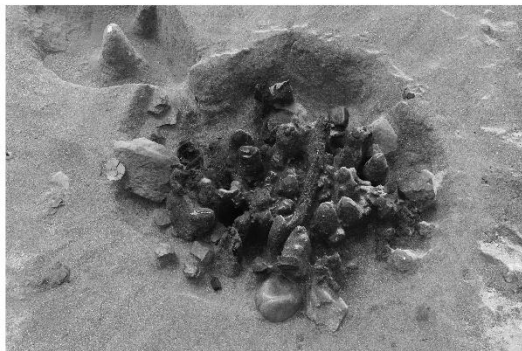
第3図 元寇防塁断面比較図



HZK2007 地点 SK03・04



HZK2006 地点 A 区 SK15

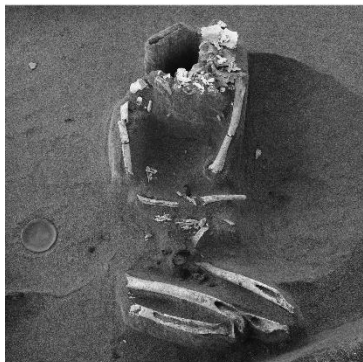


HZK2007 地点 SK24

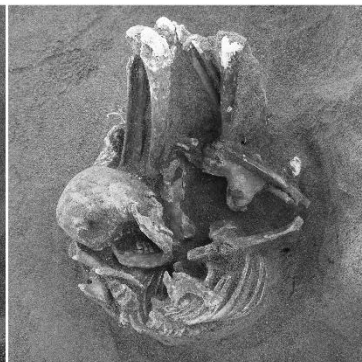


HZK2007 地点 SK36

第4図 箱崎キャンパス跡地出土の火葬土坑



木棺墓
(HZK2007 地点 ST87)



桶棺墓
(HZK2007 地点 ST173)

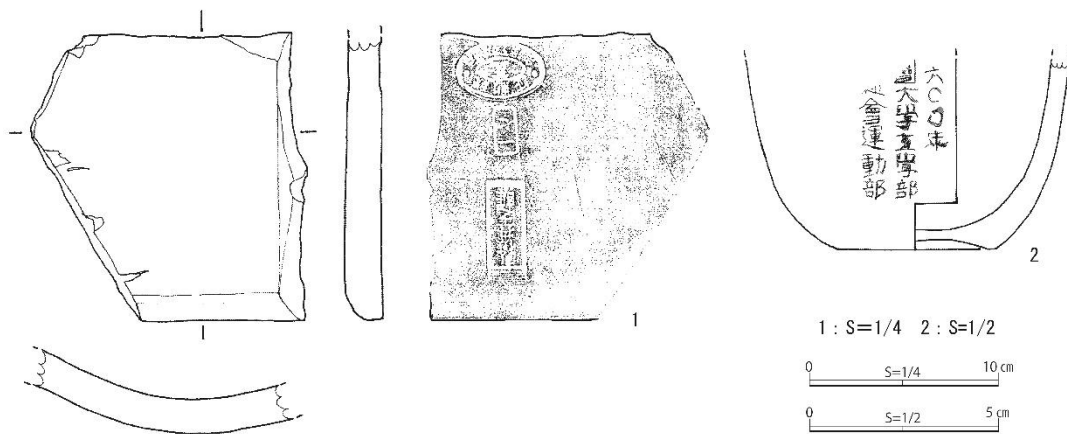


甕棺墓
(HZK2007 地点 ST78)

第5図 箱崎キャンパス跡地出土の近世墓



第6図 キャンパス出土の大学食器



第7図 箱崎キャンパス跡地出土の戦時関連遺物
(谷 2024- 第2・4図より一部転載)